

4. 押型文系土器研究における樋沢式土器の内容

1981年の樋沢遺跡の範囲確認調査とその総括をめぐるシンポジウム「押型文系土器文化」から、20年近い月日が過ぎようとしている。1980年の、その時点での研究の総括と今後の見通しを論議して、熱い意見の交換を行ったことが昨日のように思えるが、その後20年の押型文系土器研究は大きく変化し始めている。最も大きな動きは西日本の、三重県を中心とする押型文系土器発生期の問題であろう。

これに対して東日本は、特に大きな変化はなかったが、ここで相次いで重要な遺跡の調査報告書が刊行されたことは、新たな進展を予言しているかのようであった。塩尻市向陽台遺跡、岐阜県丹生川村西田遺跡、飯田市美女遺跡などである。大規模調査によるまとまった出土遺物と把握されたそれらの出土状況は、どれも以前の小規模な調査とは質量ともに違っていた。いずれもこれまでの押型文文化の内容が一層豊富となり、型式内容はもちろん石器組成など、確固たる良好な資料が提示されたことの意味は大きい。調査・報告書作成にあたられた研究者諸氏の努力は大変なものであったと想像する。

樋沢式土器については、これが提示された昭和30年以降、山形文土器と楕円文土器の帯状施文は、縄文時代早期押型文系土器の初期の姿を示す型式の土器として確定的に語られてきた経緯がある。現在は中部山岳地方にあっては立野式土器が先行するという考え方が一般的となりつつあるが、しかしまだ定説化したわけではない。その点については、先学の多くの提言があり、同時に樋沢式の型式内容が再検討もされてきた。それらは、極めて積極的かつ建設的な意見が多くあり（1980. 片岡、1987. 中島）、いずれ諸説を整理して見通しを示さなくてはならないであろうが、ここでは、最近の大きな成果を生かして該期土器の様態を明らかにする手がかりの一つになればよいと考えて、注意したい成果をまとめておきたい。

樋沢式土器の概要

さて、今回の調査において出土した押型文系土器は、一言でいえばこれまでの樋沢の出土遺物がさらに量的に充実したということであろう。これまでと全く異なる研究成果は出ていないし、是正すべきこともない。が、しかし、これまで以上に樋沢式の型式内容をより確かな構成とすることができたのは、何よりも大きな成果であった。

樋沢式の内容については、これまでの主張と大筋では変わりはないが、その文様について再度提示しておきたい。

文様は山形文、楕円文を主体に、極少量の格子目文、網目文（ネガティブ楕円文）、市松文などが伴出する。文様構成は施文方向及び帯状・密接・重複構成かによって主体となるのは次の4種である。

- (1) 異方向帯状構成（横位・縦位帯状）－山形文を主体として格子目、楕円文、縄文が若干ある口唇及び内面施文の例あり
- (2) 口縁部横位帯状以下縦位密接の異方向密接構成－山形文主体、楕円文は若干あるのみ

(3) 口縁部横位密接以下縦位密接の異方向密接構成—山形文を主体に楕円文に若干ある

(4) 横位帯状構成—山形文と楕円文ほか

樋沢遺跡ではそのほかに、量的には少ないものの縦位密接（山形文）、横位密接、縦位帯状（山形文）、異種文様（刺突文、沈線文）を並列する横位密接及び異種押型文を並列する横位密接、施文方向が不規則に重なる重複の各文様構成がある。こうしたバラエティーをすべて樋沢式の形式内容とするわけではなく、岐阜県沢遺跡や塩尻市向陽台遺跡の存在が示すように実際には（1）タイプの文様構成を樋沢式の主たるメルク・マークとする考えが一般的である。

異方向帯状構成の（1）はそれほど多くない。それより、第Ⅱ次調査では出土量も少なく、図化されていないためややもすると見落とされそうであるが、（2）・（3）のいずれかにあたる縦位密接施文の山形文破片が多いことが注意される。

樋沢下層土器 第Ⅰ次調査において観察され報告された層位的知見は、誤解されている面もあるので原文のまま引用しておく。「第Ⅱ黒土層下層から発見された押型文土器は大部分、樋沢における第一類押型文土器とした帯状施文のもので占められ、上部の層のものは第二類押型文土器としたものが多い」と記されている。調査の要約を付記すれば「前者は帯状施文、特に直交する異方向の施文を特徴とし、後者はその特徴をもたない」と記述されている。なお、第二類は「文様は口縁端から器面全体に、しかも不規則な走行をもって施されている」重複構成の楕円文が主体であることを再度ここで強調しておく。これについては第Ⅱ・Ⅲ次調査でも同様の傾向を得ている。

なお、若干補足すると「直交する異方向の施文」は（2）～（3）を含むことを第Ⅱ・Ⅲ次調査で確認したということである。

第Ⅳ次調査の層位的知見については、前回報告書でも再三述べたところであるが、上層・下層における層位的様相の差については、樋沢遺跡で提唱された「細久保式」の不規則な施文の一部（非帯状）が第Ⅱ黒土層の上層ないし第Ⅲ黒土層（上層）に多いことや、2次堆積ロームのない高地の黒色土層に多いことなど、帯状施文より後出する傾向を認めることができた。また、96.6%を占める山形文（79%）と楕円文（17.6%）の文様構成からみて、主体となる押型文は樋沢式土器であるといえよう。

なお、土層別に文様構成または施文方向の比較を試みたが、包含層が薄かったため、明確な傾向を読みとるまでの完全な分析ができていない。これについてはⅡ～Ⅲ次調査分も併せて集計して結果を出したいと考えている。

樋沢式土器の文様構成について——異方向密接構成の土器

前回第Ⅱ次調査において、層位的知見から一つの見通しを述べて宿題とした（1987年樋沢押型文遺跡調査研究報告書本文29頁）。それについては今回の調査ではほぼ完全に検証できたと考えている。

従来より、帯状構成は樋沢式を特徴付ける異方向帯状構成（横位・縦位帯状）の山形文土器が主であると思われてきたが、第Ⅱ次調査ではこれとともに、異方向密接施文（横位帯状以下縦位密接）がそれ以上に主体的に存在することがわかった。しかし量的に少ないことや図示できるまとまった土器がなかったことから、やや説得力に欠けるきらいがあったが、今回は豊富な出土量によって存在を具体的に明らかにすることができた。

押型文系土器破片のうち、文様の読み取れない細片を除いた約2,000点について、文様の施文方向を主に、わかる範囲で文様構成もあたってみた結果が第5・6表である。

施文方向 文 様	横 位 施 文				縦 位 施 文			
	带状	密接	帯密不明	計	带状	密接	帯密不明	計
山形文	275	38	196	509	108	296	367	771
山形文(黒鉛入り)	49	1	12	62	88	5	9	102
楕円文	10	91	131	232	1	28	29	58
網目文	1	0	0	1	0	0	2	2
格子目文	1	2	1	4	5	1	5	11
縄文	10	1	9	20	10	0	3	13
撚糸文	3	0	4	7	0	0	0	0
				835				957

第5表 施文方向別破片点数

文様構成 文 様	横位・縦位带状 (異方向带状)	口縁部横位带状 以下縦位密接 (異方向密接)	口縁部横位密接 以下縦位密接 (異方向密接)	横位・縦位 (異方向) (帯・密不明)	
山形文	13	6	23	39	
山形文(黒鉛入り)	20	0	0	2	
楕円文	0	1	14	7	
	33	7	37	48	125

注：口縁部～胴上部破片で全体文様構成の判読できるものについてカウントしている。例えば口縁部破片の横位带状は頸部以下のバラエティーがあって特定できないので、帯・密不明としている。

第6表 文様構成別破片点数－異方向施文について

文様構成は、破片の部位によっては確定的に見ることができない。頸部破片のように、口縁部と胴部の両方の施文方向がわかればある程度類推できるが、しかしそれでも、異方向施文の場合は口縁部で带状か密接か細部まで決定できない。したがって、大多数の破片が施文方向を見取るだけである(第5表)。それによると、横位・縦位施文の方向の割合は、山形文では53%が縦位带状か密接、横位施文は47%であるが、この中には口縁部横位带状または密接以下縦位密接が多数あるはずである。黒鉛入りの山形文についても同じである。带状施文の縦位が圧倒的に多い。これは縦位施文部分の占める面積の方が大きいということも原因かもしれないが、楕円文は逆に横位施文が18%と、5%の縦位施文に比べ大差がある。

次に文様構成のわかる山形文の破片で見ると(第6表)、異方向密接が異方向带状に比べやや多い。これに横縦(口縁部横位以下縦位)の異方向施文ということまではっきりするが、縦位は密接と決定できないまでも、恐らくほとんどが異方向密接施文といってよい、帯密不明を加えると、異方向密接構成が圧倒的に多いことがわかる。

楕円文には異方向帯状はない。ちなみに胴下部まで帯状施文もほとんどない。

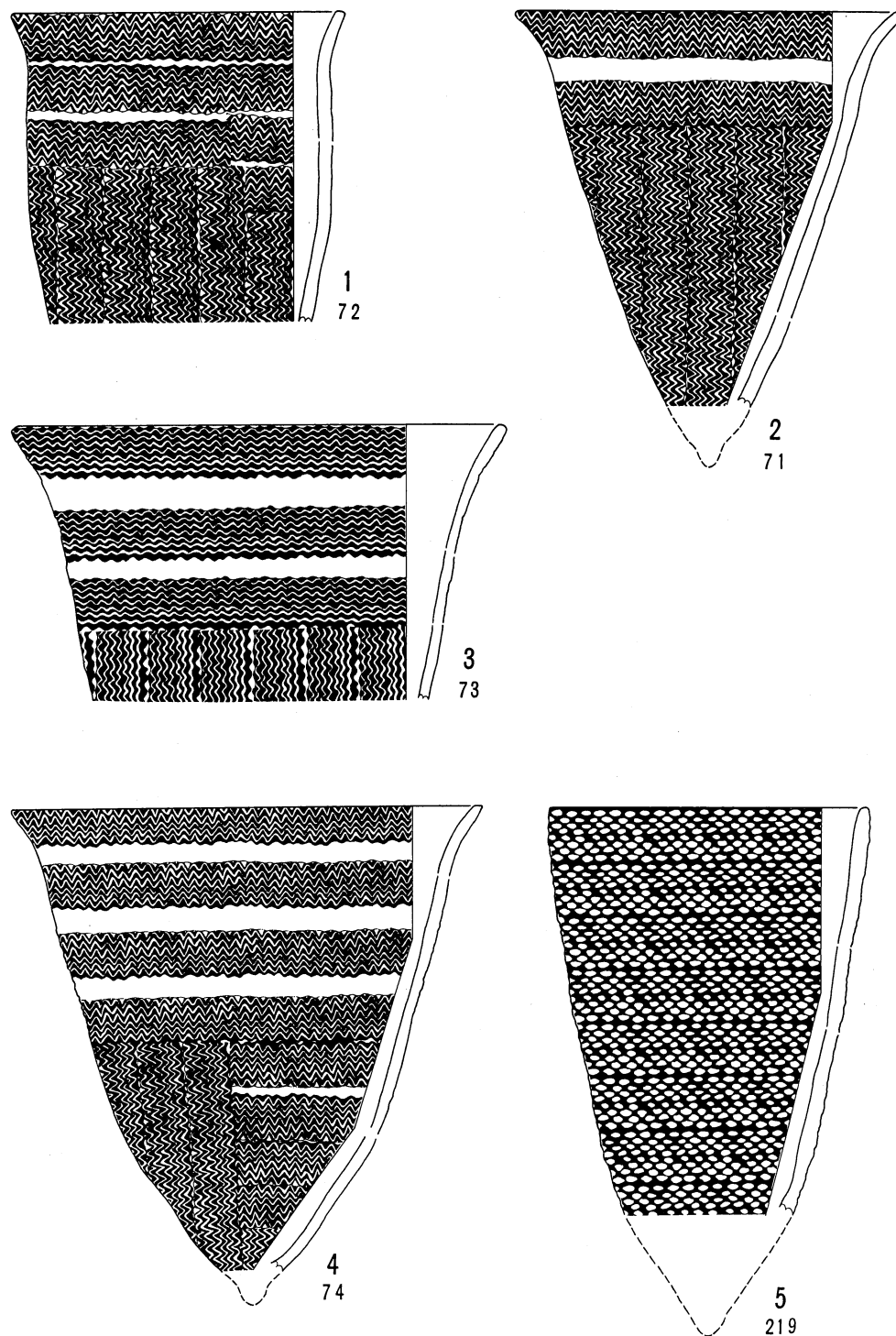
異方向密接構成の山形文・楕円文土器

今回の発掘調査で出土した土器の中で器形復原のできた資料は4点ある。

〔第95図 1 山形文〕

第18図72の山形文土器である。拓影図からおこしているので一種の模式図である。

黒鉛入りの山形文に比べて、山形が大きく鋭角に山が高いこと、原体の長さ27.5mmと長いことが特



第95図 樋沢遺跡出土山形文土器と楕円文土器の復原想定図（1：4）

徴である。したがって山形の条は6条と多い。文様構成は口縁部が横位帯状（3帯）以下縦位密接構成である。横位の無文帯幅はやや狭い。胴部の無文部は球面に対する長い原体の接触不良による掠れであって無文帯を意識したものでも、擦り消したものでもでもない。器形は頸部が軽く内にくびれて、やや強く外反する。

〔同3 山形文〕

第18図73の拓影図からおこした山形文土器で、口縁部横位帯状（3帯）以下縦位密接構成である。1と同じタイプであるが器形は全体にゆるく外反する。やはり原体は30.0mmと長く、山形は7条もある。山形文は第1種の一般的な刻みである。

〔同2 山形文〕

第17図71の山形文土器で、拓影図からおこした。底部まで破片があり、器形の全体がわかる。1の山形文と同一原体を使用していると思われる。数値に微妙な差があるが1・2と次の4も同じ原体で、粘土が違わらしく胎土の差がはっきりしているし、整形痕にも違いがある。どうしても接合しなかったので別個体とした。文様構成は口縁部横位帯状（2帯）以下縦位密接構成である。胴部に見られる縦の無文部は1と同様に無文帯ではない。特にこれは上部ほど広く無文部が残り、下にくるほど狭くなって途中で原体を置き換えて無文部を出さないように密接に施文していることが読み取れる。器形は頸部で強く外に開くが、以下は急にコケタように底部に窄まる量感のない砲弾形である。

口唇部下の施文にあたっては、途中で原体の上下を替えて施文していることが、原体端部処理で明瞭にわかる。

〔同4 山形文〕

第19図74の土器である。破片接合が少ないため若干復原想定図になっているが、底部は比較的まとまって接合しているので器形、文様とも原形に近いと考えている。原体は1・2に同じと思われる。文様構成は口縁部横位帯状（4帯）以下縦位（横位）密接構成である。胴部の施文は、明らかに横位施文がきちんと密接に底近くまで及んでいることがわかるが、器面を半割して縦と横の施文で埋めている可能性が高い。こうしたアレンジは2の口縁部にもかすかに片鱗が認められるが、この場合は接合する破片がなくてこの先がどうなるか興味がある。このタイプは横位施文と縦位施文の伝統（系統）の折伸といえるかどうか意見が分れるところであるが、類例の増を待ちたい。

無文帯の表出

このほかに第16図69の山形文土器も、これまで気付かなかった文様構成である。横位無文帯の置き方が横位施文の帯状によって生み出されるのではなく、縦位施文の際に無文帯を意識して、隙間を空けて施文している例である。この土器は原体長さ18.8mm、径3.8mm、山形は4条と樋沢式の一般的な原体を用いている。無文帯を設ける意識の表れと見てとりたい文様構成である。

樋沢式押型文土器は、帯状の異方向に施文されることが特徴的とされてきた。しかし、量的には異方向の、帯状ではなく、密接施文される土器が樋沢ではむしろ主体を占めていることがはっきりした。再度、細かな文様構成をまとめると、口縁部が横位帯状（第95図[↓]2・3・4）か、横位密接（第95図[↓]主）で、以下胴部が縦位密接の2形態があるということである。横位の帯数はそれぞれ異なる。

このように、ほぼ全形を復原できるもの2点、図上復原は2点のほかに、68・69・70・78など4点というまとまりは、型式内容を補って余りある成果である。すでにこれについては栃原岩陰で山形文

の同様例の出土があり、従前、指摘されたことであるが（1980. 片岡）、これで樋沢式土器の型式内容に新しいタイプを加えることができたと考えている。

すなわち樋沢式の特徴として「異方向帯状」に「異方向密接」を加えることができた。すでに立野式では口縁部縦位密接以下横位密接構成の網目文（ネガティブ楕円文）、あるいは縦位密接構成の山形文などが知られているところである。こうした密接構成と強い関連を示す樋沢式の一類型として第95図1～4の土器群を位置付けておきたい。

これらの中に山の形状が大きい山形文、原体が長い山形文（1・2・4）があることは重要である。また、楕円文にも異方向密接があり、これは粒の大きい楕円文でもある。このことは異方向密接構成の一群が立野式と強い関係にある一群として位置付けられることを示しているのではないだろうか。

樋沢式土器の型式内容については、片岡肇氏や中島宏氏から再編の積極的な論考があり、古くは沢遺跡、新しくは向陽台遺跡のより斉一化した樋沢式の報告がある。樋沢、細久保系の押型文土器について、型式内容や細久保式の混乱している内容などについて、これまで再三自説を述べてきたのでここでは再論しなかった。今回の調査で樋沢式と立野式の関係はますます見通しがはっきりしてきたので、これまでの考え方を、より一層すすめていきたい。これについては十分に資料を添えて考え方を問いたいと考えている。

今回はⅠ～Ⅳ次調査のすべてを一括して整理したわけではなく、そのため土器の復原作業をあえてしていない。再整理して総括的な資料図版を提示し、改めて樋沢式土器の型式内容と押型文系土器の位置付けを試みたい。

おわりに、押型文原体について、あるいは縄文・撚糸文原体について、いずれも岡本東三氏から実調のうえ、いくつかの貴重なアドバイスをいただいた。また押型文系土器全般について、特に異方向密接構成の理解について戸沢充則調査団長と、神村透氏からご教示いただいた。心から謝意を表します。

（会田 進）